

三社祭 (弥生の花浅草祭)

弥生なかばの

花の雲

鐘は上野か浅草の

利生は深き宮戸川

誓ひの網の古へや

三社祭の氏子中

もれぬ誓ひや網の目に

今日の獲物も信心の

おかげお礼に朝参り

浅草寺の観世音

網の光りは夕あぢや

昼あみ夜網に凧もよく

乗込む

河岸の相場にしけは

生貝生鯛生鱈

なまぐさばんだばさらんだ

わびた世界ぢやないかいな

そなた思へば七里が灘をのう

命や捨貝きたものなしかえ戻らうよ

捨貝来たもの

命や

すぐが来たものなしかえ戻らうよ

サアサ何んとしよか

どしよかいな

撞いてくりやるな八幡鐘よ

可愛いお人の目をさます

お人の人の

可愛いお人の目をさます

サアサ何としよか

どしよかいな

帰りまじよ

待たしやんせ

憎や烏が啼くわいな

斯かる折柄虚空より

風なまぐさく身にしむる

呆れて暫し兩人は

大空きつと見あぐれば

「善か悪かの二つの玉

「あらはれ出でたは

「こいつは

「稀有だわえ

「アール 不思議やな

「一つ星なら

長者にも

ならんで出たる二ない星

あらはれ出でたる二つ玉

「思ひがけなく落散る風の

ぞつと身にしみうるたへ伏し

悶絶するこそ

「悪にとつては

事もおるかや

悪七別当

悪禅師

保元平治に悪源太

梶原源太は梅ヶ枝を

蛭の地獄へ落したためしもありとかや

「これは昔の物語

「それがいやさに 気の毒さに

おいらが宗旨はありがたい

弘法大師のいろはにはへと

かはる心はからくり的

北山時雨ぢや

ないけれど

「振られて帰る晩もあり

それでお宿の首尾もよく

「とかく浮世は

儘にはならぬ

善に強きはコレ善の綱

〜牛に曳かれて善悪は

浮かれ拍子の一踊

〜早い手玉や品玉の

品よく結ぶ玉だすき

かけて思ひの玉櫛げ

開けて口惜しき玉手箱

かよふ玉銚

玉松風の

もとはざんざでうたへや

うかれ鳥の烏羽玉や

うややれ

さうだぞ 声々に

〜しどもなや

〜唄うも舞ふも

法の奇特に善玉は

消えて跡なく失せにけり。